志和―漁村屋号の成立と展開―

南西から志和集落を望む

志和川に沿って開けた集落で太平洋に面し、高南台地の年貢・燃料類の重要な積出港、漁村として栄えた。弥生時代の磨製石斧が発掘された志和遺跡（旧志和小学校跡）や平安時代の墓とみられる吹ヶ谷遺跡があり、集落の歴史は古い。文献上の初見は建武２年（1335）の薬師寺の棟札で、至徳元年（1384）銘の薬師堂鰐口（(『土佐国古文叢』)）もあり、鎌倉時代末期には現代につながる集落が成立していたことが分かる。戦国期の志和について記した江戸期の『仁井田郷談』(明和７年（1770)）や、志和の商家の文書群「志和池家文書」など文献史料も豊富で、郷土史研究が盛んに行われてきた地域である[1)]。ここでは、先学の整理も参考にしながら、村の歴史的景観を復元し、その生活誌を記したい[2)]。

１、『地検帳』に見る村落景観

志和のある仁井田郷は、建長 2 年（1250）以来一条家の所領となって代々伝領され、仁井田庄とも呼ばれた。正安 2 年（1300）の「一条家政所下文」(『金剛福寺文書』) などから鎌倉末期～南北朝期にも一条家の支配が確認され、西氏（西新居の庄司）や東氏（東新居の庄司）が荘官として支配していたとされる[3)]。長宗我部氏が土佐を支配する『長宗我部地検帳』(以下『地検帳』) 段階では、一条氏傘下だった仁井田五人衆の諸氏も仁井田郷各地に散在的に所領を有している。

天正 16 年（1588）2 月に検地が行われた『地検帳』(仁井田之郷地検帳）では、「志和之村」が現在の大字に該当する。検地された土地面積は 17 町 2 反余で、全て「志和分」と記されており、仁井田五人衆の志和氏の支配下にあったと考えられている（山本 1964)。屋敷は 78 軒で、中世には大きな集落が展開していたと推測されている[4)]。『地検帳』記載地名を聞き取りにより現地比定し、戦国末期の村落景観を復元していく。

（1） 集落

屋敷 78 軒のうち 41 筆が「浜ヤシキ」(浜屋敷）にあり、一帯に家屋が立ち並ぶ海浜集落が形成されている。ここには浦の管理を行う刀禰 1 のほか、舟運や船の製造修理に関わる舟頭 1、水主 2、番匠 3 の屋敷も記載されている。『地検帳』では刀禰は与三兵衛だが、9 年後の慶長 2 年（1597）頃の「秦氏政事記」(土佐国蠹簡集）に記された「志和ノ浜　刀禰　五反　岡田清介」との関係は不明である。

現地比定が難しいものもあるが、残存する地名や検地順を参考に『地検帳』記載の屋敷地を大胆に推定・復元してみた[5)]（図１)。検地が行われた西側から見ていくと、志和川の北側の「大屋敷」から志和川を渡って南側に「土ゐヤシキ」がある。「右近兵衛タ」「右近兵衛ヤシキ」を挟んで「ヒシヤウヤシキ」があり、「木衛門ヤシキ」「ヲキヤシキ」「五良左古ヤ

シキ」など6軒[6]を挟んで「中マチヤシキ」が存在する。続いて「カサノ谷クチ」など3軒がある。志和川を渡って北側には、「十良左衛門ヤシキ」「ワタ」「ワタヤシキ」「ワタノタニ」「徳元庵」などがあった。「浜ヤシキ」（浜屋敷）41軒の西隣には、「土ゐノ谷」沿いに、「西ノカイチ」「中屋シキ」「春慶坊」「山本ヤシキ」「林香庵」「北ヤシキ」を比定した。「原地」の7軒は先行研究では、「浜ヤシキ」の一部と考えたものもあるが、「原地」は志和川河口南側の地名で、3～4mと少し標高の高い台地上に畠を間に挟んで7軒の屋敷があったと推測した。また、南東部の山側の「中谷」にも3軒屋敷が存在している。

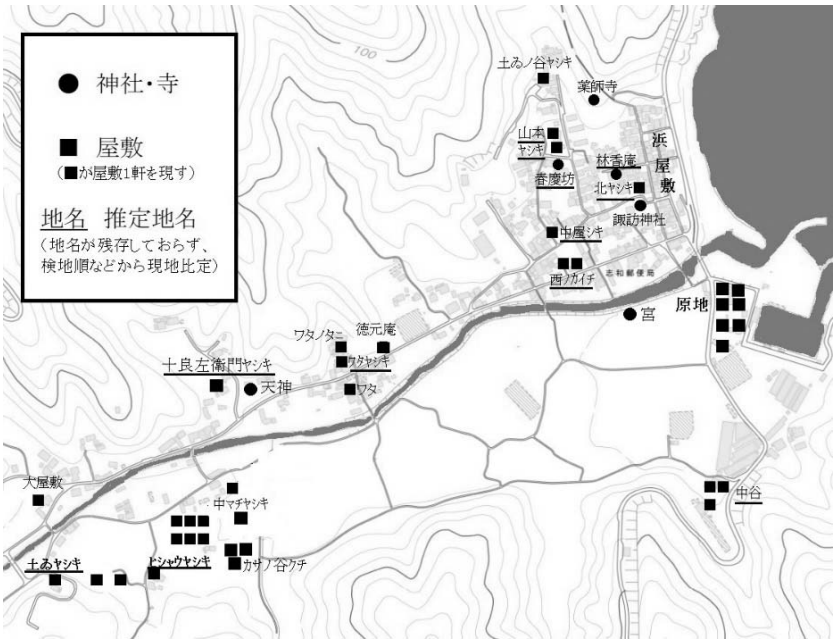

図１　『地検帳』から復元した戦国末期の屋敷地

（浜屋敷は屋敷41軒が散在するため■を落としていない）

このように見てくると、志和川の上流では、「土ゐヤシキ」を最奥に、「ヒショケ谷」や「笠ノ谷」など水源に近く、日当たりの良い南側の山裾が屋敷地として選ばれたことが分かる。注目すべきは、「笠ケ谷」の東側ではなく、西側に屋敷地が集まっている点である。笠ケ谷は東へ流れ、標高7～8mの屋敷地のある西側に比べ、東側は標高が6m以下で河口に近づくにつれどんどん低くなる。笠ケ谷の氾濫などのリスクを軽減するため、高標高地が屋敷地として選ばれた可能性が高い[7]。志和川の北側では「宿の谷」「和田ノ谷」「土ゐノ谷」の谷の出口部分に屋敷地が散居的に存在している。現在の浦分では、浜屋敷は集住が進んでいるものの、その西側はまだ屋敷が少なく、浜側から集村化が進んだ状況が確認できた。

（２）開発・水利

現地比定が難しいものもあるが、残存する地名や検地順を参考に『地検帳』記載の耕地を推定・復元してみた（図２）。地図を見て分かるように、戦国末期の段階で現代に残る耕地の地名のほぼ全てが開墾されている。畑地や山田の開発は限定的で、谷の開口部および平地部の田が広く開発されている。北南を山に囲まれ、多くの谷水が確保できることから田への利水は安定し、広範に土地開発が進んでいた状況が確認できる。この生産力を背景に、浜屋敷など浦分の集落は発展したと考えられる。

田への利水は水元となる「セイモト（清本）」の地名が、西奥の耕地「シワカ■（志和川）ノセイモト」で確認できる。志和川からの取水が確認できるが長距離の用水路ではなさそう

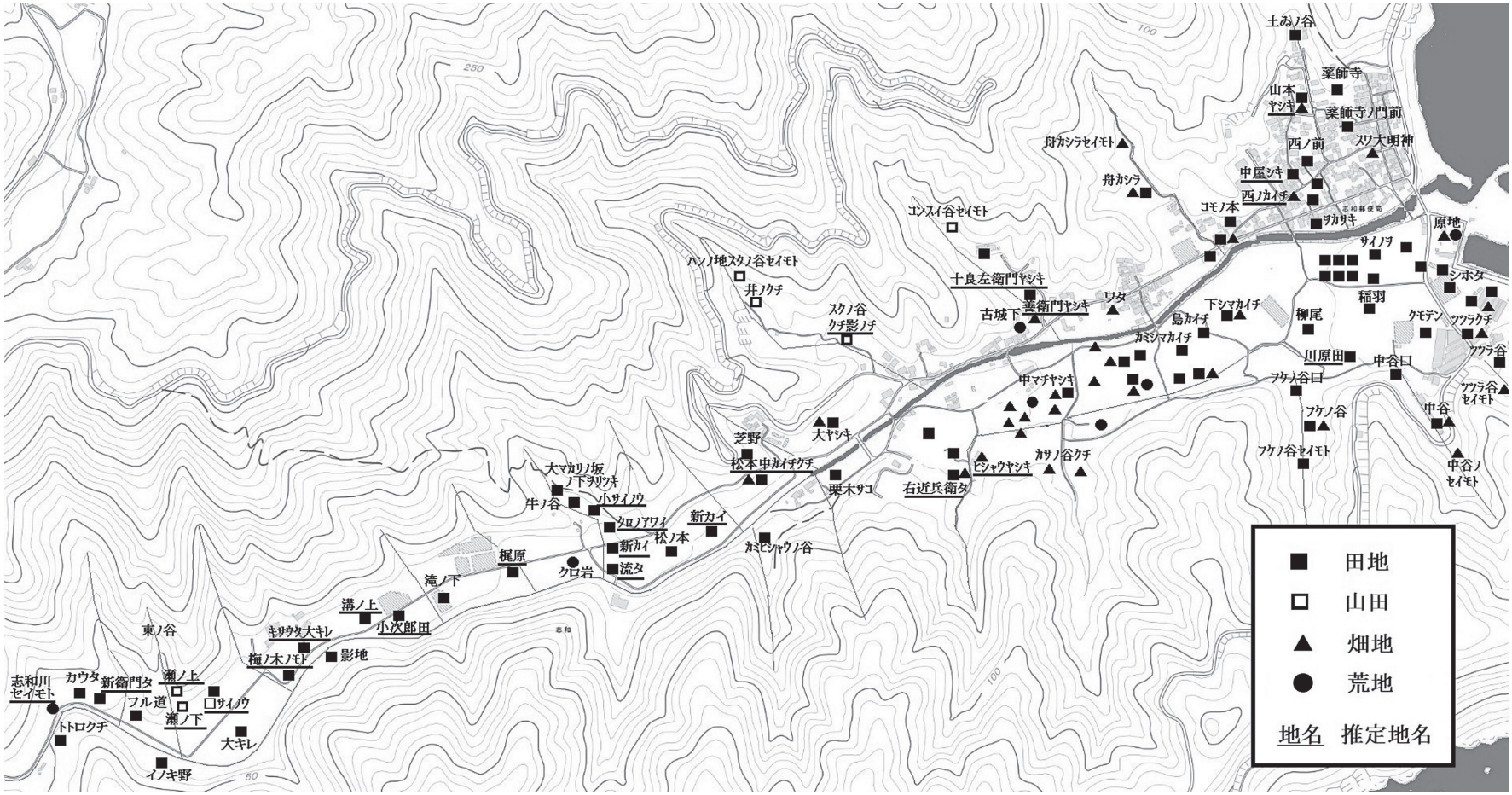

図２　『地検帳』から復元した戦国末期の耕地

で、多くは谷からの水を利用した田が志和川沿いに広がっていたと考えられる。いずれも谷奥まで広がる田は少なく、谷の開口部に開けた田と推測される。「スクノ谷」では谷の高い場所に「井ノクチ」の地名があり、ここから取水して棚田（山田）が営まれていた。「東ノ谷」「コンスイ谷」の奥にも谷田が確認できる。山田の表記はないが、牛ヶ谷の田は上下に連続しており、棚田だったと考えられる。河口部では「柳尾溝懸」「シホタ溝ヲコエテ」など谷奥から流れてきた川から取水した溝（水路）もあったようである。

初期の開発地を推測してみると、開発領主が最初に屋敷を構えた「土ゐヤシキ」に近い「ヒシャウノ谷」（ヒシャケ谷）の周辺が考えられる。小字は「堂ケ原」で、宗教的な拠点となる薬師寺も昔はこの周辺にあったといい[8)]、集落で生産性の高い耕地（「右近兵衛タ」の上田、「五良左古ヤシキ」の上畠田など）が見られることから、ここが初期の開発地であろう。「堂ケ原」の西側には交通要衝である大曲坂の降り口があり、まずは志和川の上流に開発を進め、下流にも耕地を広げていったと考えたい。棟札などの記録から、薬師寺は建武２年（1335）に瑠璃山麓「堂ケ原」から「土居ノ谷」へ移っており、その契機として 14 世紀前半には河口部（浦分）の開発が進んでいたことが推測できる。

また、畑地は、「カサノ谷」の西側・東側に多く、谷奥の山畑や屋敷の前畑も確認できる。

（３）江戸時代の志和[9)]

地誌類から江戸時代の志和についてみてみると、元禄期（1688～1704 年）の『元禄地払帳』では総地高 276 石余、うち本田高 171 石余・新田高 105 石余で、『地検帳』以後の開発地である新田高が地高の１／３近くを占めており、17 世紀に土地開発が進んだ状況が確認できる。図２の戦国末期の開発状況から推測すると、谷田や畑地の開発が進められたのではないか。本田高の多くは藩主山内家の蔵入地（162 石余）で、新田高は貢物地 73 石余を除いて矢野数右衛門の領知となっており、集落は郷分と浦分に分かれ、それぞれに庄屋が置かれていた。庄屋は渡辺氏（浦、寛永 8 年）、竹村氏（浦、宝暦 5 年･文化 2 年）、古谷氏（郷、文化 2 年・寛正元年）、田上氏（郷、天保元年・14 年）などが務めている[10)]。

寛保 3 年（1743）の『寛保郷帳』では戸数 191、人口 825、馬 30、猟銃 7、船 46、網 36 で、戸数は戦国期から約 150 年間の間に 2 倍以上の 113 戸増えており、土地開発と浦の発展が伺える。文化 10 年（1813）の『南路志』によれば浦分は 122 戸 456 人、船 22（鰹漁 7・小舟 15）、網 19（大魚 3・飛魚 2・手操３・磯立４・餌取 7）で、制札場・火立場・分一役所・御米蔵がある。御米蔵には仁井田郷と窪川郷内の年貢米が納められ、薪や炭、漁物などが志和から積み出された。

２、昭和期の村の姿

（１）地名

海の地名　『四国南部の釣り場』[11)] によると、小鶴津、大鶴津も含めて志和には複数の磯があり、それぞれに名前が付いている。北から「チョーナ」「テビク」「ヒラバエ」「ワレハエ」「小黒バエ」「黒ハエ」「ヨコバエ」「徳助バエ」「アカバエ」「マルバエ」「オオジ」「ミノ

コシ」「大ハエ」「長ハエ」「スズメ」「コーデ」「コアカハエ」「ミツバエ」「沖のカブリ」「カブリの平ハエ」の 20 カ所がある。意味が不明なものもあるが、基本は岩礁の特徴を色や形で現した接頭語と岩礁を現す「ハエ」の接尾辞がくっついた地名が多いことが分かる。「徳助バエ」は命名者の名前によるものだろうか。「スズメ」「チョーナ」のような岩礁の形だけが付けられた地名もある。「沖のカブリ」「カブリの平ハエ」の「カブリ」はすぐ側の「冠崎」から取られたと推測される。

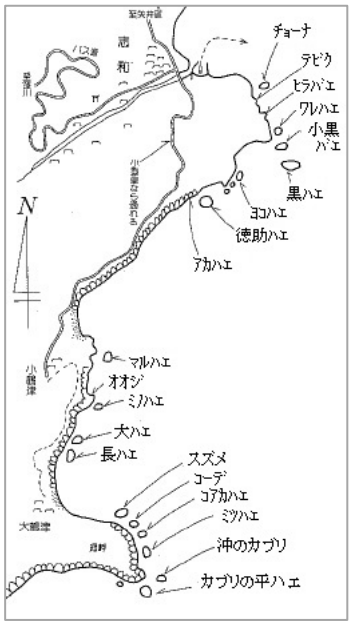

図３　志和の海の地名

（『四国の釣り場』の図を改変）

タナイチ　テナガエビや魚が捕れた。

コゴノモト　大きな木があって水が湧いていた。

ゴズイ谷　白皇さん（白皇神社）の祭事の行水で使われる谷。

ハネ　川岸についてバラの木があった。ここは深い。

リンカ坂　中土佐町の矢井賀に抜ける坂。志和峰へ上がる峠道は「大曲」と呼ぶ。

ヒショケ谷（ヒショガ谷）　志和一族の屋敷があり、志和氏の財宝が埋匿されているという伝承がある[12]。

マットリ山　お城を的にして矢を射ったという伝承がある。小字は板取山になっているが、松取山のことであろう。

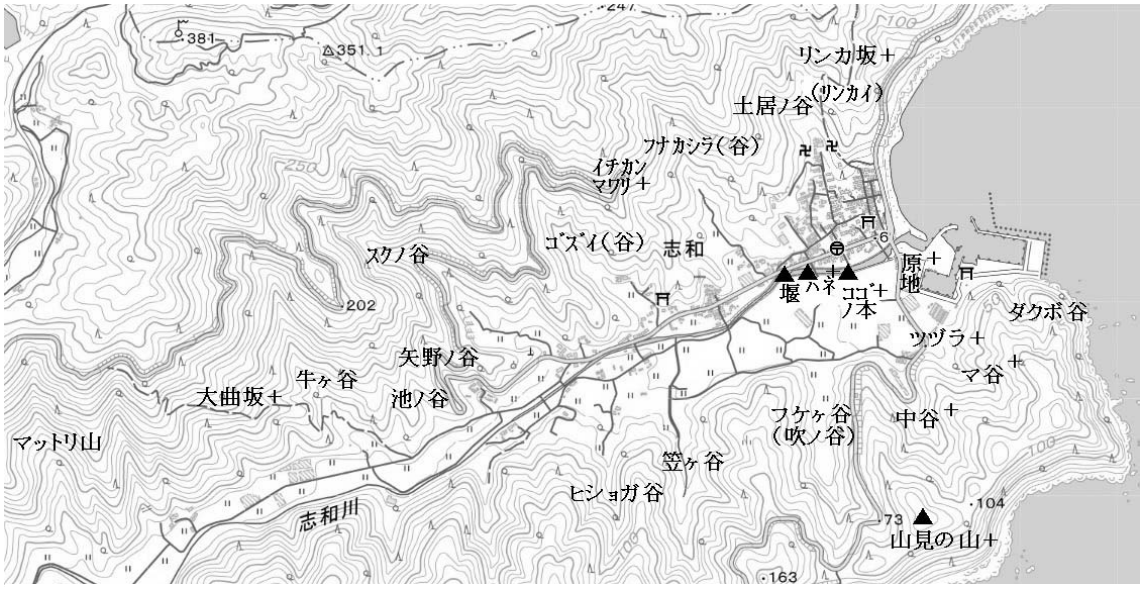

図４　志和の地名地図（＋は新出地名）

（２）集落・宗教

集落　明治初期の『高知県神社明細帳』には諏訪神社など志和の神社の氏子が 832 人とあり、これが郷分・浦分併せての人口と推測される。明治 18 年（1885）に調査された『高知県漁村調査書』によると浦方は 145 戸・人口 720 人とあり、浦分の戸数・人口が郷分に比べて圧倒的に多かったことが推測できる。現在は、学校から西をだいたい郷、東を浦分と呼

ぶ。隣接する小鶴津地区、大鶴津地区は限界集落となり志和地区に合区となっている。

歌舞伎・人形芝居　昔諏訪神社の神祭で、青年団が歌舞伎をやったこともあった。昭和 30 年代には、プロの人形芝居が来て諏訪神社を舞台にして芝居をした。興行の間、一座の子どもが２、３日小学校に来ていた。

豊漁、豊作を祝う行事「夜潮」の準備と浦分集落

（３）生業

田舟　志和川の南側は、沼地をつぶして田んぼにした湿田。雨がふったら水が溜まるので、田舟を漕いで田へ行っていた。米はあんまりようない。田んぼでは米のみ。田の畦には小豆を植えていた。耕耘には赤牛を使い、後馬に変わった。

畑　「原地」の畑では麦や芋、リュウキュウ、ナスを作った。麦は山の段々畑でも作った。山の畑は畑のふちにササゲを植えて、カライモも作った。桑畑もあった。

果樹　ビワと梅、山の畑のふちへ植えた。ミカンは戦前から植えていたが増えた。

明治の漁業　『高知県漁村調査書』によると、志和浦のカツオ・鮪漁の船は 47 隻、カツオは竿釣り、小八田網はカツオの餌を捕るのに使った。八田網でウルメ、イワシ、大魚網でブリ、磯立網で磯魚、手繰網で赤物魚を捕った。春はブリと磯魚、アワビ、夏秋はカツオ・マグロ、冬はイワシ・タイを捕っていた。カツオは節にして、イワシは乾魚（干物）に加工した。販路は高知市のほか、鰹骨の類は仁井田や窪川で販売された。明治 35 年（1902）に設立された志和浦漁業組合の組合員 100 人だった。昭和 8 年（1933）には志和漁港が築港されている[13)]。

ブリ大敷　明治 30 年（1897）に上ノ加江に敷設されたブリ大敷網の好調を見て、志和で浦分総会を開き須崎町の西内森蔵を資本主として、冠崎に第 1 号の大敷網が敷設された。第 2 号は志和有志の巾着網組を解散してブリ大敷網にあらためて 2 号とした。明治 38 年（1905）には冠崎を休場し黒磯魚場に敷設したが不漁で再び冠崎に戻している。大正 4 年（1915）の調査では、志和にブリ大敷の出稼ぎ者が 25 人（うち船長 5 人）いて、能登や丹後、薩摩、長門に敷設指導に行くなど明治 36 年以降県内外への技術移転にも関わった。その後大敷漁は昭和 44・45 年（1969・1970）にピークを迎え、減少に転じ、平成になって組合は解散している[14)]。戦前戦後には漁があったら船から「赤」の旗（長いふんどし）が上がった。志和の山の上に山見の場所があり、物見役が望遠鏡で見て合図をする。船は 4 隻立てでブリを捕った。漁があった時は大敷の漁場は沖だったが、近場に変わったという。

小網　伊勢エビは小網で捕る。これは個人の漁だった。ブリの子の「ヤズ」は小網でもかかった。小網は 1 隻の船に奥さんが付いて 2 人が乗っていく。

釣り漁　メジカは釣りで、矢井賀からもよく釣り来ていた。イワシも釣りだった。

ジャコ　取った大ジャコ（キビナゴ）やヒラゴ（マイワシやウルメイワシの稚魚）の漁は５軒くらいがやっていた。浜で釜ゆでして白い袋に入れて汽船に乗せて発送された。

節生産　ウルメ、サバは頭のけて節にしていた。メジカ、カツオも節にしていた。カツオを櫛指しして焼いて、サバの塩焼きみたい。蒸して火であぶって焼いていた。

炭焼　炭焼をやっている人もいて、炭俵を編んで丸にして、芝を敷いて焼き上がった炭を縄で落ちないようにくくって出した。炭も薪も奥山の上木を一画いくらで買って、切りに行っていた。

南海地震の影響　昭和 21 年の南海地震では、津波は諏訪神社の下まで来た。波が来ている所をお薬師さんまで逃げた。けが人はいなかったが、高齢者がどうしても逃げないと行って大変だったという。津波の後、浜がしずんでアサリがとれなくなるなど影響は大きかった。

（４）交通流通

帆掛け船　油のあるイワシを樽（桶）に塩漬けにして、「デガイ」と呼ばれる帆掛け船に乗せて、愛媛や広島の宮島に運ぶ商売をしている人もいた。イワシは樽ごと打った。デガイの長さは３～５ｍ、船の真ん中に帆が立っていた。

馬車引き　志和にも３人いて、荷物を窪川まで運んでいた。東又の人もやっていた。

薪の搬出　薪は郷の人が荷車にぐらぐらにつめて運んで浜まで持ってきて船に載せた。築港ができるまでは、浜から船へ物や人を運ぶのは「はしけ」（小船）。はしけから沖に停泊する船に乗り移る板をかけて船へ乗り込んだ。

天草の搬出　天草はむしろで乾燥させて踏んで、むしろを丸にしたのに詰めて汽船に積んで出した。岩に付く海藻も売れて、よく拾いに行った。食べ方は豆と炊いて食べた。

（５）志和と漁村屋号

家屋敷に付けられた呼び名「屋号」は、今も県内各地に残っているが、使われることが少なくなり、消失の危機にある小地名の一つである。志和においても、現在商家屋号と呼ばれる漁村地域特有の屋号が多数残っている。文献史料を元に、その成立背景を探ってみる。

屋号の成立　土佐の山村地域（旧物部村）においては、古文書から屋号の成立は 15 世紀半ばの室町時代までさかのぼることができる。当時屋号は年貢を賦課される作人層の屋敷と周辺の田畑を指す言葉として使われ、16 世紀の戦国時代も同様であった。中世にさかのぼる古い屋号として「土居（屋敷）」「中屋」「仁井屋」などの屋号が古文書や『地検帳』から確認できる。江戸時代になると、詳細な土地調査が行われ、一地一作人の原則が徹底されるようになり、田畑と屋敷が切り離され、屋敷自体を指す言葉として屋号が使われるようになったと推測される。屋敷数の増大は、江戸前期の 17 世紀の長距離用水路開削による新田開発と並行して進んだようで、屋号の多くは江戸時代に命名された可能性があると考えられている[15)]。漁村屋号の成立や展開過程については、研究は行われておらず不明である。

『地検帳』の屋号と集落　『地検帳』から戦国末期の志和村について見てみる。領主の屋敷である「土ゐヤシキ」（土居）の周辺に、「右近兵衛タ」に隣接する「右近兵衛ヤシキ」、前畠を伴う「木衛門ヤシキ」、「五良左古畠」に隣接する「五良左古ヤシキ」がある。これらに

冠せられた名の人物では、右近兵衛は村内に作人や給人としても確認できないが、木衛門は「木衛門ヤシキ」に居住している。右近兵衛も中世の志和氏に従属した有力作人層に系譜を持つ屋敷地であろう。また、屋敷はなく畑地や荒れ地として検地された土地が、同様に名前を冠して「大良衛門ヤシキ」「善衛門ヤシキ」のように屋号で呼ばれている。「大良衛門」「善衛門」とも浦方の浜屋敷に居住が確認でき、移住が行われたことが分かる。農村屋号には、土地開発者の名前を冠して呼ぶ者が多く、この類いの屋号が広く使われていたことが確認できる。すなわち、旧物部村と同様に、戦国末期の段階では屋号は屋敷のみを指す言葉でなく、年貢の賦課主体として作人層の屋敷と田、畠など一帯の土地が屋号で呼ばれている。

次に浦分を見てみると、60 軒近い屋敷が検地されるが、屋号として確認できるものは「北ヤシキ」「山本ヤシキ」「中屋シキ」くらいしかない。これだけ多くの家屋のある漁村であっても、江戸時代には使われた商家屋号は全く存在せず、この段階では屋号を名乗るような家としての商業活動は行われていなかった可能性が高い。「北ヤシキ」は「スワ大明神」（諏訪神社）の北側にあるためそのように呼ばれたとみられ、「北ヤシキノ北」「スワ大明神東」など両者が屋敷地を検地する際の基準になっている。屋敷の居住者として浦を統括する刀禰のほか、番匠（3 人）、船頭（1 人）、水主（2 人）、人ふ（3 人）などの記載がある。和泉境にルーツを持つと考えられる境与三左衛門の居住も確認でき、上方との海運の関係が想定できる。

居住者の多くは漁民や海運に関わる者とみられるが、小さな浦で船大工とみられる番匠が 3 人[16]、人ふが 3 人といるのは気になる点である。「土ゐヤシキ」周辺から移住したとみられる「大良衛門」は浦方で舟頭を務めている。検地の 4 年後には文禄の役が始まり、仁井田郷からも西原氏や志和氏が出兵したことを考えれば、安芸郡の浦のように朝鮮出兵に伴う造船基地としての性格や特殊な集落形成[17]、集住の在り方も想定しなければならないだろう。

江戸時代の屋号　屋号を持つ商家が志和で出てくるのはいつ頃であろうか。江戸後期に志和で在郷商人として米の売買や金融業を行い「米屋」を名乗った池家の活動をみてみたい[17]。「志和池家文書」[18] によると、池家は安政 6 年（1859）の「指出」の中で「私先祖代々百姓業仕来り申候」と記しており、百姓から在郷商人に飛躍していったことが伺える。池家は安政期には 5 町 7 反余の田地を所有、約 15 石の現米収入を確保し、「地主手作」すなわち田地経営を行う生産基盤をしっかり持った在郷商人である。横川末吉氏は、浅丞が志和村老役を務めて有力百姓として村運営や藩の売米に関与する寛保元年（1741）に池氏発展の始まりを想定している。浅丞の子で天明 6 年（1786）に分家・独立をした初代浅七は、文化 3 年（1806）に苗字帯刀を許されている。天明、寛政、享和、文化、文政期は、藩が商物方限令を出して活動を制限するなど在郷商人が栄えた時期で、この時期に池家の商業活動も発展したようである。文化 8 年（1811）には、池浅七が土佐の郡方を代表する 8 人の富豪に数えられている。横川氏は池家の発展の背景に、志和が仁井田郷の米の積み出し港として在郷と高知城下をつなぐ中継港になっていた点を上げている。武士の知行米の売買から

商業活動を始め、各村の役人層と関係を持ち米の売買を広げ、金融業や酒屋[20]（久礼浦・仁井田郷柿木山の酒屋を買収）、漁船経営（カツオ漁船）、ブリ網（上ノ加江）、カツオ節製造にも参入している。このように「米屋」は18世紀中頃、有力百姓として米の売買に関わり、米にとどまらない事業に関わる在郷商人として発展した。

「米屋」が飛躍した18世紀中後期、天明4年（1784）の吸江寺（高知市）への寄付台帳『一切蔵勧化帳』には、志和村の寄付者として「塩屋」（7軒）、「升屋」（1軒）、「山下屋」（2軒）、「今津屋」（1軒）、「みまち屋（三町・美町屋）」（2軒）、「中屋」（1軒）、「中村屋」（1軒）、「中の屋（中野屋）」（1軒）、「山方（山形）屋」（1軒）の計17軒の商家が確認できる。この段階で「米屋」以外にも多くの商家が屋号を持って存在していることが分かる。「塩屋」や「山下屋」「みまち屋」は複数軒あり、分家して同じ屋号を名乗っていると推測され、18世紀後半には相当に屋号の分化が進んでいる。

漁村屋号の成立と展開　18世紀にはすでに商家屋号が浦方で普及していたと考えると、その成立はいつ頃なのだろうか。慶長年間以降の土佐清水市内の屋号を寺の過去帳類から洗い出し集成表[21]（表１）を分析してみよう。過去帳への記載は、屋号を持つ商家の主人の死亡時なので、活動時期とタイムラグも考慮して考察したい。

江戸前期の寛永年間（1624～43）には三崎の「舛屋」、寛文年間（1661～72）・延宝年間（1673～80）には「袋屋」（松尾）が確認される。「袋屋」は酒造株も取得していた。「舛屋」が「米家」のように百姓層系譜なのか、戦国期に浦方にいた水主層からの発展なのかは分からないが、17世紀前半は土佐藩執政・野中兼山の主導で上方と城下町、浦方、村方を結ぶ領国経済圏が整備された時期で、これを背景に漁村でも商家が台頭し、商家屋号が成立したと考えたい。

江戸中期（宝永～明和年間）に入ると、三崎では「舛屋」も継続したほか「問屋」「見世屋」「熊野屋」「糀屋」「舛市屋」「泉屋（和泉屋）」が現れ、計7軒が確認でき漁村の発展をうかがわせる。寛保年間（1741～43）に現れた「舛市屋」は「舛屋」の分かれ屋号であろうか、また「問屋」「糀屋」「見世屋」といった職の形態にまつわる屋号、「熊野屋」はカツオ漁などで交流のあった和歌山、「泉屋」は上方の和泉と関係のある屋号であろう。

表１　土佐清水の浦における屋号の出現時期（『土佐清水市史』より作成）

地域	江戸前期	江戸中期	江戸後期
三崎	舛屋	問屋、見世屋、熊野屋、糀屋、舛市屋、泉屋	立田屋、龍田屋、福見屋、門屋、大黒屋、柏屋、岩見屋、橋屋、栗屋、大和屋
松尾	袋屋		舛市屋
下ノ加江		吉良川屋、玉屋、田丸屋、橋子屋、播磨屋、讃岐屋、丸市屋、角屋、灘屋、前ノ橋屋、前ノ浜屋、阿波屋、ニハマ屋、糖屋、掛屋、飴屋、吉田屋、スサキ屋、鈴屋	夷屋、山口屋、奥屋、若屋
大津		新屋、大津新屋	
下川口		木屋、木塚屋、川口舛屋	浦舛屋
爪白		玉屋	
大浜		袋屋	

下ノ加江でも宝永年間（1704～10）に「吉良川屋」、正徳年間（1771～15）に「玉屋」が現れ、享保年間（1716～35）には「田丸屋」「橋子屋」「播磨屋」、元文年間（1736～40）には「讃岐屋」、寛保年間（1741～43）には「丸市屋」、延享年間（1744～47）には「角屋」、寛延年間（1748～50）には「灘屋」、宝暦年間（1751～63）には「前ノ橋屋」「前ノ浜屋」「阿波屋」「ニハマ屋」「糖屋」「掛屋」「飴屋」「吉田屋」「スサキ屋」「鈴屋」が現れ、計 19 軒が確認できる。安芸郡にまつわる「吉良川屋」、須崎の「スサキ屋」のほか、国外の「讃岐屋」「阿波屋」の屋号は、土佐国内および四国内との海運・交流の活発を物語っている。

18 世紀半ばには、三崎や下ノ加江のような大きな浦ではなく、小さな浦でも屋号が確認されるようになる。寛保年間（1741～43）に大津で「新屋」、延享年間（1744～47）には大津で「大津新屋」、下川口で「木屋」「木塚屋」、寛延年間（1748～50）には爪白で「玉屋」、宝暦年間（1751～63）には大浜で「袋屋」、明和年間（1764～71）に下川口「川口舛屋」が現れる。

三崎や下ノ加江で屋号が大きく増え、大津や玉屋、大浜、下川口でも屋号が出現したとみられる 18 世紀前半が、漁村における商家屋号の拡大期と考えたい。この時期は、志和で池家の「米屋」が商業活動を始めた時期とも重なる。江戸中期は野中兼山後の寛文改替で、浦方課役の減免や商業活動の自由が進められたことや、網漁の発展、カツオ節加工の導入も住んだことで、商家の台頭が進んだと考えたい。

江戸後期（安永～弘化年間）には、さらなる商家（屋号）の増加が見られる。三崎ではこの時期、享和年間（1801～03）に「立田屋」「龍田屋」、文化年間（1804～17）に「福見屋」「門屋（角屋）」「大黒屋」「柏屋」、天保年間（1830～43）に「岩見屋」「橋屋」「栗屋」、弘化年間（1844～47）に「大和屋」が現れ、江戸前中期との総計 17 軒となる。同じ屋号で分家した商家もあると考えるとさらに多くの商家が屋号を持って活動していたのだろう。また、下ノ加江では、安永年間（1772～80）以降の過去帳がないためその後の動向が分からないが、この時期に「夷屋」「山口屋」「奥屋」「若屋」が現れている。「岩見屋」「山口屋」などの屋号は、北前船で上方から瀬戸内海、日本海を回る西廻り航路の発展との関わりも推測できる。

また、下川口で天保年間（1830～43）に「浦舛屋」、松尾に「舛市屋」が現れており、大きな浦で成功した商家（屋号）が、分家等によって小さな浦へ進出していく様子がうかがえる。

江戸後期の 18 世紀後半～19 世紀前半は、屋号を持つ商家が大きく増加する発展期と考えられ、志和の天明 4 年（1784）の『一切蔵勧化帳』に 17 軒の屋号が記載された状況とも符合する。

一方、江戸末期（嘉永～慶応年間）は、屋号に大きな変化は見られない。

このように漁村屋号は、17 世紀前半に成立し、18 世紀前半に拡大し、18 世紀後半～19 世紀前半に浦内や浦々に分化して発展していったと考えられる。

近現代の屋号　土佐清水の屋号の分析では、江戸前期に成立した屋号が江戸末期まで継続

1	ゴズイ谷	漢字は行水谷	21	岡田	カツオ節製造（林2018）、カツオの仕入れも
2	紺屋		22	浜市屋	漁師（林2018）、カツオ漁（佐々木2001）
3	紺屋		23	角屋	漁師・カツオ節製造（林2018）
4	コモノ本		24	三町屋	山野上惣九郎船団・廻船・漁業（林2018）、18世紀初期に伊豆方面などへカツオ漁へ（佐々木2001）
5	紺屋		25	山下屋	
6	山新	木賃宿（林2018）、大きな藁葺きの家	26	袋町屋	カツオ節製造（林2018）
7	美町屋	三町屋とも	27	銀行	中野屋（林2018）
8	米屋	米つきも	28	下駄屋	山形屋・駄菓子・食料品店（林2018）
9	塩屋旅館		29	美町屋	豆腐製造→雑貨店（林2018）
10	扇屋	造り酒屋（林2018）	30	今津屋	イワシ・カツオ節製造（林2018）
11	田村屋		31	奥池	大敷の特許を取って儲けた。奥池の金は尽きないとも言われた。
12	中野屋	カツオ節製造（佐々木2001）			
13	ナカゼン	中野ぜんすけが塩を販売	32	和食屋	安芸郡から来る、酒屋（佐々木2001）
14	湯屋	風呂屋、風呂がある時は幟が立っていた	33	扇屋	酒製造
15	たるまる館	旅人御宿・中野旅館（林2018）、映画館・芝居	34	山サ	汽船の世話（林2018）、小船で客を沖まで運ぶ
16	塩屋	廻船・米運船（林2018）、高知・大阪まで年貢米を運び、品物を買い入れる（佐々木2001）	35	谷口屋	風呂屋・漁師（林2018）、豆腐屋
17	山形屋	祖先は志和浦刀禰（佐々木2001）	36	山チカ	宿屋
18	川崎屋	網元・漁師（林2018）	37	山よし	塩屋（林2018）
19	浜屋	漁師（林2018）、カツオ漁（佐々木2001）	38	山ソウ	魚屋
20	長野	カツオ節製造（林2018）	39	塩屋	

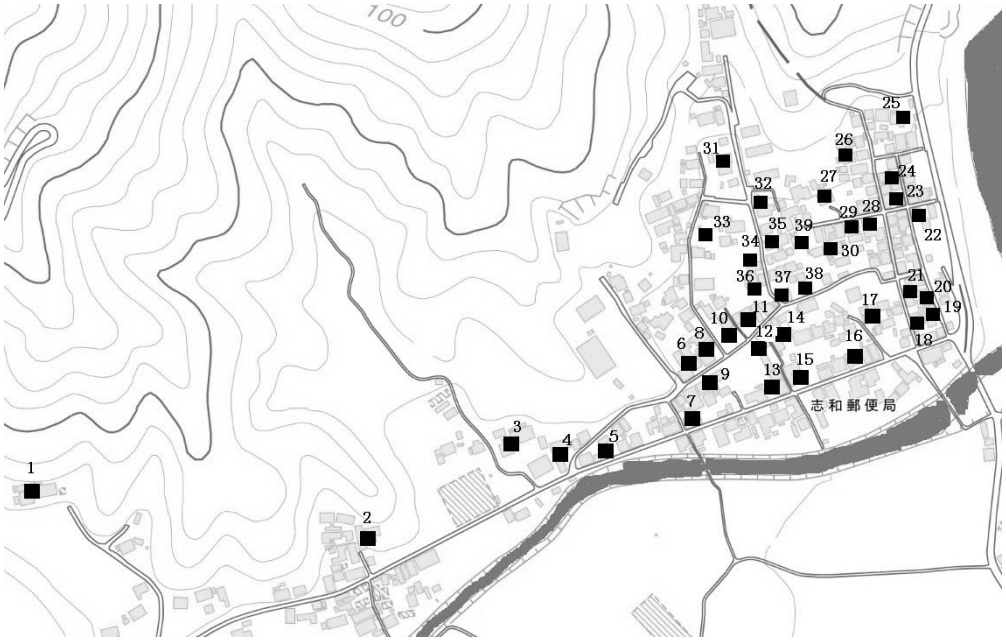

図５　志和の屋号地図

して使用されたことも確認できた。初代直系の商家が 200 年続いたとは考えにくく、その血統では新たに屋号を創設するのでなく、分家などによって初期と同じ「屋号」が継承されていったことが推測される。すなわち漁村の商家屋号においては「屋号」が伝統的な権威となり、商売を後押しする「屋号分け」のような役割を果たしたと考えたい。

四万十町志和においても同様に現代まで、『志和池家文書』や『一切蔵勧化帳』に見られる江戸時代の屋号が残っている。これらをまとめたのが図５の屋号地図 [22] である。塩屋、三町屋を持つ家は複数あり、屋号の分化が見られる。「米屋」と池家との関わりは確認できていない。他地域の名称を持つ「和食屋」が確認されるほか、町部などでよくある「山サ」「山よし」「山ソウ」「山チカ」といった記号屋号も確認できる。

（楠瀬慶太）

【註】

[1] 諏訪奨 1938『郷土志和史伝』、清光企画 1966～1981『志和』１～5、岡田巧 1978『矢井賀小史』、佐々木馬吉 1983『天正の窪川２』土佐光原社、諏訪将人 1996『志和物語』、佐々木泰清 2001『志和二千年 志和郷七ヶ村史』、志和活性化協議会新聞部会 2012～2022『志あ和せだより』1～18 などがある。

[2] 2019 年 6 月に、山野上香井さん（昭和 2 年生）、山本みや子さん（昭和 24 年生）に聞き取り調査を行い、現地踏査を行った成果の報告である。

[3] 山本大 1964「解説」『長宗我部地検帳　高岡郡下の二』高知県立図書館

[4]「志和村」『日本歴史地名体系　高知県の地名』平凡社

[5] ■の屋敷地は屋号等に伴うものではなく、大まかな位置を推定したもので、正確な位置を示したものではない。傍線で示した地名は、小字で確認できず聞き取りでも収集ができなかったもので、隣接する土地の地名や検地順から位置を推定したものである。

[6] 6 軒の屋敷地の地名は確認できないが、検地された周辺の土地はいずれも畠ヤシキや畠、畠田で、利水のしづらい谷と谷との間の土地と考え、位置を推定した。

[7] 中世に水量の多い谷を避けて集落が形成される事例は、大忍庄槇山郷（旧物部村）でも確認されている（楠瀬慶太 2013「高知県旧物部村の地名に見る山の生活誌」『四国中世史研究』12 号）。

[8]『志和二千年 志和郷七ヶ村史』

[9]『日本歴史地名体系　高知県の地名』の志和村の項を元に整理した。

[10] 前掲８）

[11] 土屋雅昭編 1981『四国南部の釣り場』マリンジャーナル社

[12]『志和物語』

[13] 窪川町史編集委員会編 2005『窪川町史』窪川町

[14] 前掲 13）

[15] 目良裕昭 2015「豊臣期城下町安芸の形成と朝鮮出兵」『海南史学』53 号

[16] 隣で志和より規模の多い「与津浦」（四万十町興津）では、『地検帳』に番匠の記載はない。

[17] 楠瀬慶太 2018「土佐山村の屋号研究試論」『高知大國文』49 号

[18] 横川末吉氏の一連の研究（横川末吉 1969～70「土佐藩における在郷（浦）商人の一類型（一）～（三）」『土佐史談』122･123･125）から紐解いてみる。

[19] 前田和男編 1973『中土佐町史料 志和池家文書 1』中土佐町教育委員会、前田和男編 1973『中土佐町史料 志和池家文書 2、安和大師堂文書』中土佐町教育委員会。

[20] 池家の酒屋経営については、広谷喜十郎 1996「志和郷酒屋池家について」『志和物語』に詳しい。

[21] 土佐清水市史編纂委員会編 1979『土佐清水市史　上巻』土佐清水市

[22] 林一将 2008『第三回　志和地域の昔を探る』JA 四万十女性部窪川の歴史散歩資料の屋号地図および、『志和二千年 志和郷七ヶ村史』の屋号に関する記述、聞き取り調査を元に屋号地図を作成した。古老への聞き取りでは林 2008 とは一部位置が異なる屋号も確認されたが、聞き取りの内容を優先して記載している。また、『志和二千年　志和郷七ヶ村史』に記載がある屋号「仲屋」の位置を確認できなかった。